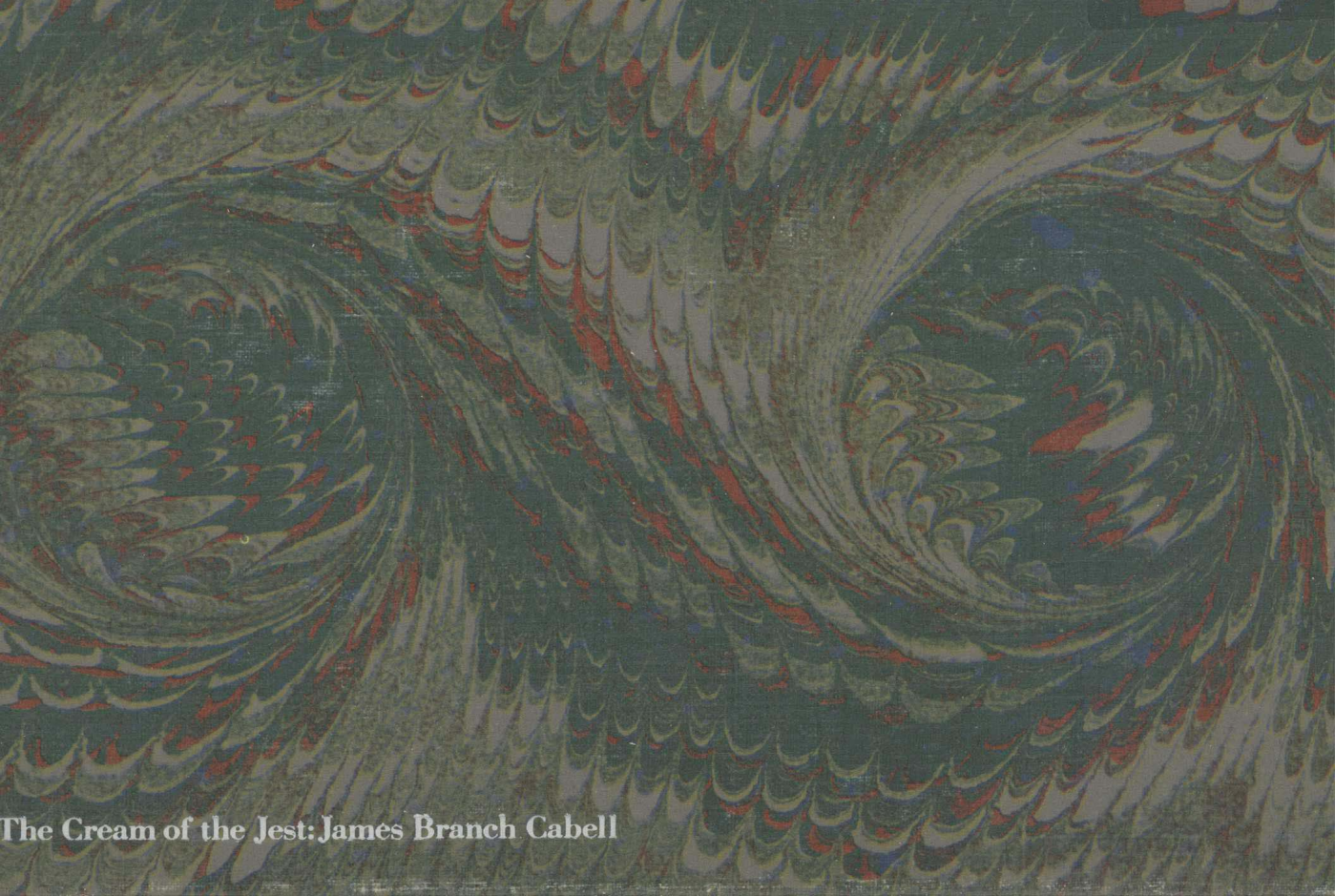


The Cream of the Jest: James Branch Cabell

紀田順一郎　荒俣宏
責任編集

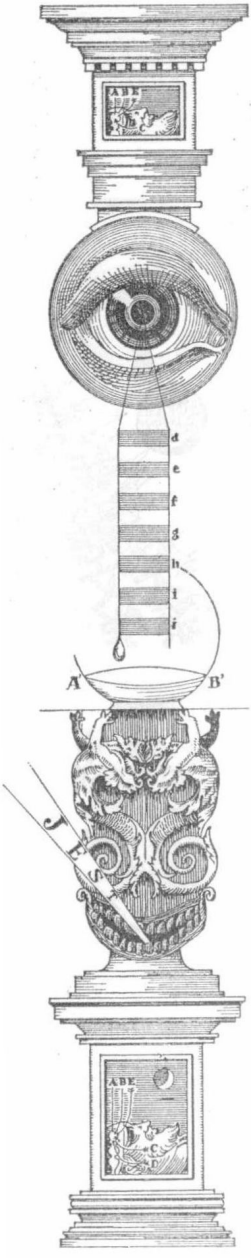
世界幻想文学大系㉔

密

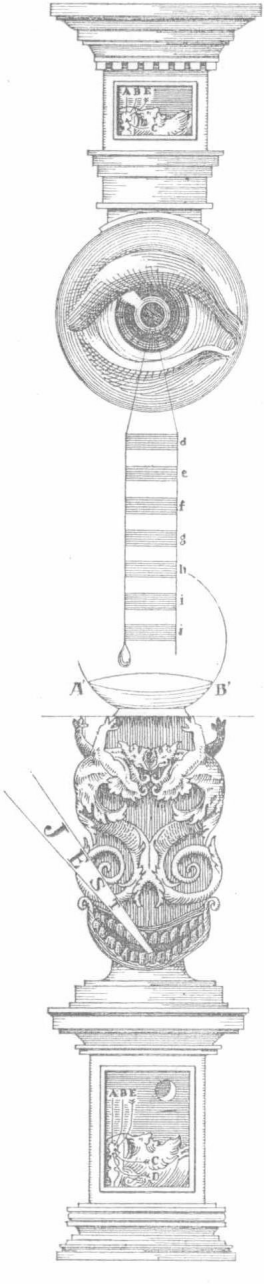
J・B・キャベル
杉山洋子 訳
the Jest: James Branch Cabell

国書刊行会

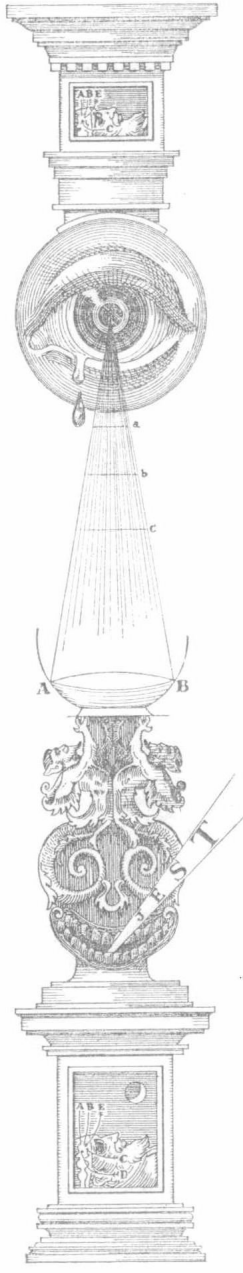
世界幻想文学大系　責任編集―紀田順一郎＋荒俣宏
第二十九巻
夢想の秘密
昭和五四年十月二〇日印刷　昭和五四年十月二五日初版第一刷発行
著者――ジェイムズ・ブランチ・キャベル
訳者――杉山洋子
発行者――佐藤今朝夫　発行所――株式会社国書刊行会
東京都豊島区巣鴨三―五―一八　郵便番号一七〇　電話〇三―九一七―八二八七　振替東京五―六五二〇九
造本――杉浦康平＋鈴木一誌　本文挿画――渡辺冨士雄
印刷――セイユウ写真印刷株式会社　製本――大口製本印刷株式会社
定価――二、五〇〇円
●―落丁本・乱丁本はおとりかえします



杉山洋子すぎやまようこ
一九三〇年、台北生れ。
関西学院大学文学部卒。現在、関西学院大学教授。
専攻、英米文学。
主要著書――
『虹と花崗岩――ヴァージニア・ウルフ論』（英文）北星堂書店、一九七三年。
『ファンタジーの系譜――妖精物語から夢想小説へ』中央出版、一九七九年。



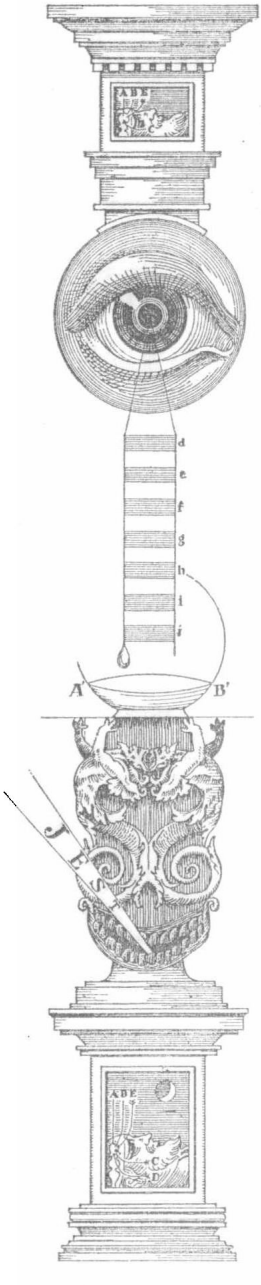
世界幻想文学大系——第二十九巻



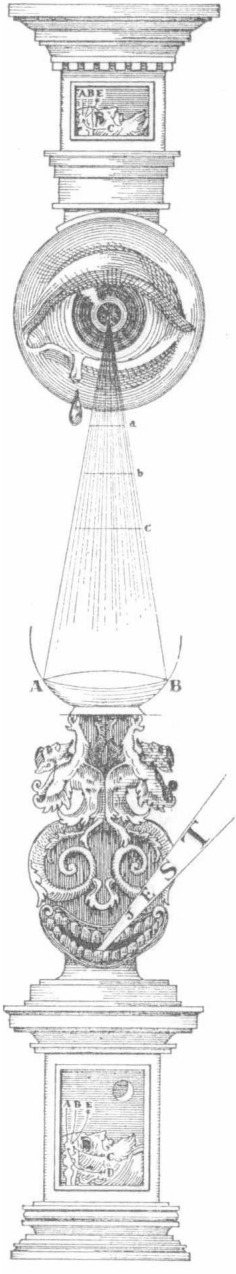
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

夢想の秘密

J・B・キャベル——杉山洋子＝訳



目次



7——夢想の秘密　J・B・キャベル

7——夢想の秘密

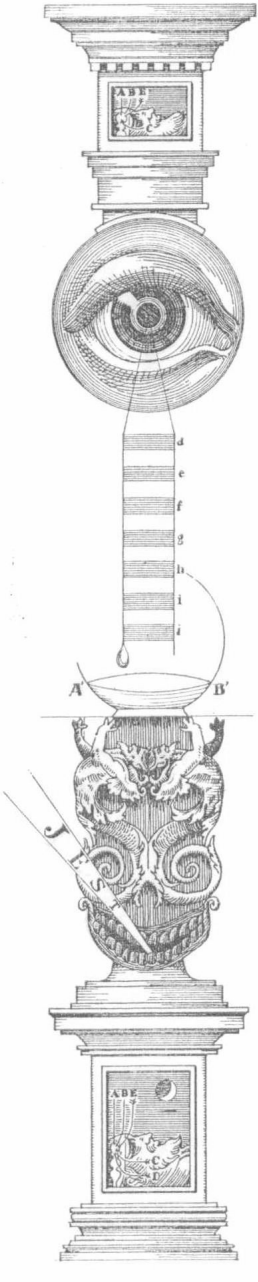
11——第一部—遥かなるポアテム国のこと

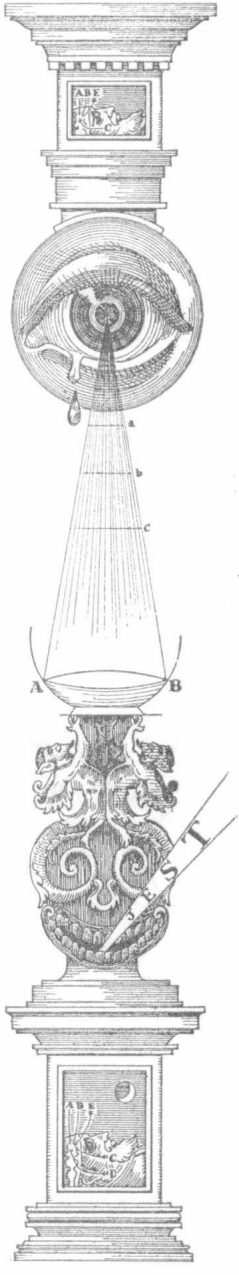
47——第二部—リッチフィールド、及び諸々の儘ならぬ事ども

103——第三部—世に隠れたる二重生活者数多ありとは自明の理

133——第四部—回り回って啓発的且つ恙無き結末へ

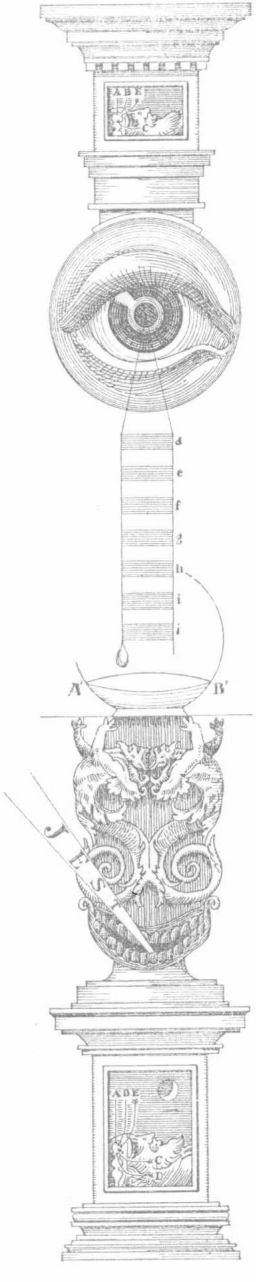
171 ――第五部―エッタールを追うて詩人は報いを得る
217 ――第六部―リッチフィールドはポアテムから遠からず
247 ――エピローグ―すべての喜劇にふさわしき結末
255 ――リッチフィールド家系図
303 ――J・B・キャベルの世界劇場――杉山洋子




a
b
c
A
B
T
S
E

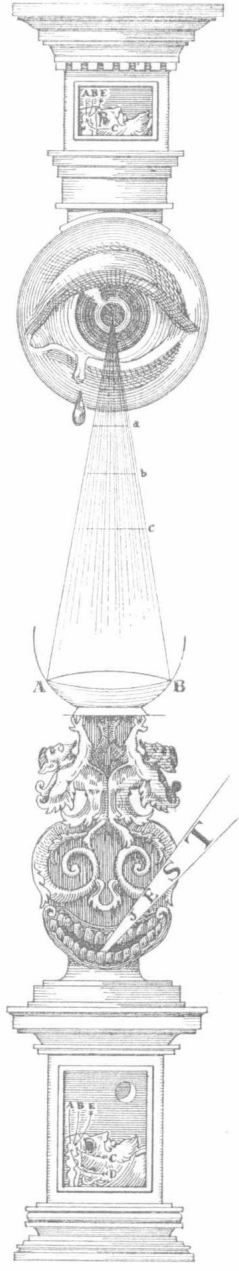
夢想の秘密

逃避の喜劇



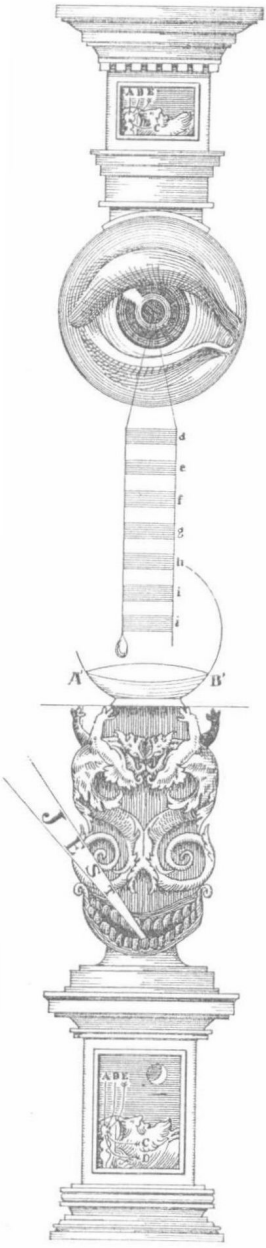
ルイザ・ネルソンに。

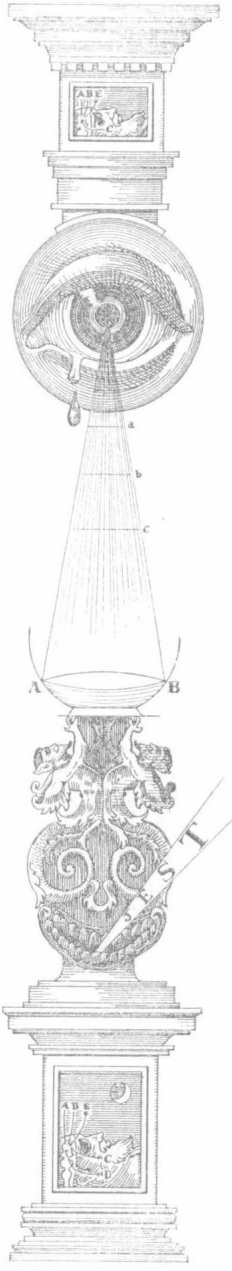
――老いといえどもあなたの愛から
私を引き離すことはありますまい。

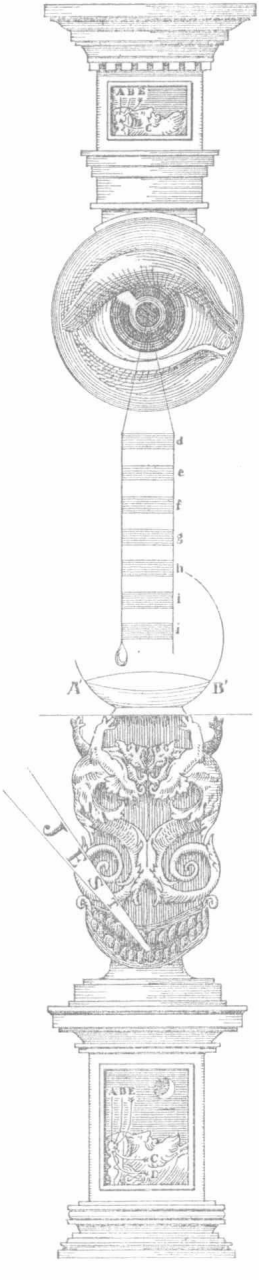


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

我が憧れの国へ今宵夢で
あなたは私を伴った。
あなたは美しかった……
ああ、何と美しかったことか！
だが、我が愛するは
あなたの影に過ぎぬ故、
愛しき女よ、
あなたの実在は確かなのだ。



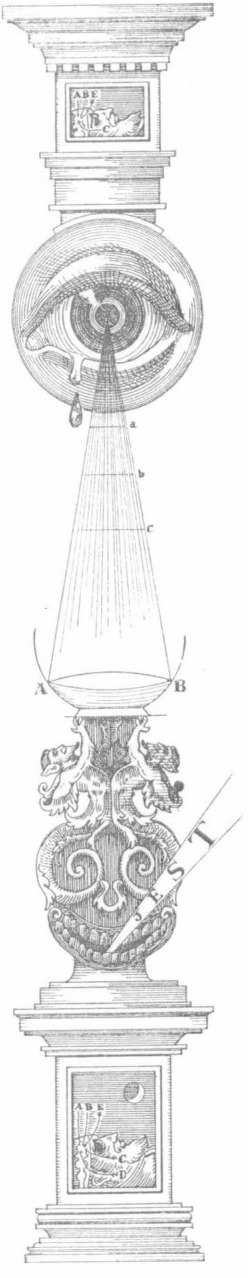

a
b
c
A
B
S
T
A B E
A B E



第一部——遙かなるポアテム国*1のこと

美しき淑女方よ、汝らが誇り
地に落ちぬうちに、席譲り立ち去れかし
その優しき魅力あたりを払う
美の化身の到来近き故。

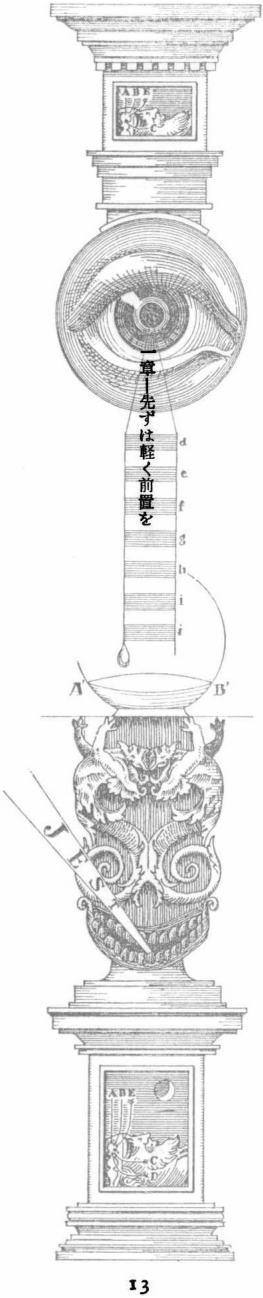
エッタールこそ
かの不死鳥の如く
その面影は
此の世のものならず。



奇才フェリックス・ケナストンが現代作家陣営から姿を消して以来、ずい分と評論が書かれてきたし、ケナストンの生涯についてならフローザー氏の『伝記』がおよそ知るべきほどの事実を網羅している。それにしても、思うにこの『伝記』を読めば誰しも感ずるに違いないのだが、「不惑の坂越えて」ケナストンに起ったあの一大変化――つまり、まあまあの詩才が『アリソンを恋う男たち』の錚々たる天才作家に突如類稀な変身を遂げたこと――についての説明は結局されずじまいなのだ。

以下、ケナストン自身の説明をお聞かせしよう。謎の鳥一羽狩り出せば、仲間一群皆飛び立つ、というような結果になるかも知れぬが、まあどう転んでもこれは御当人の立場から、問題の変身の次第を包まず語るものである。

記憶に留めておいて頂きたいのだが、この話は、社会人としてのケナストンについて私が知るところに加えて、以下書き記すこと

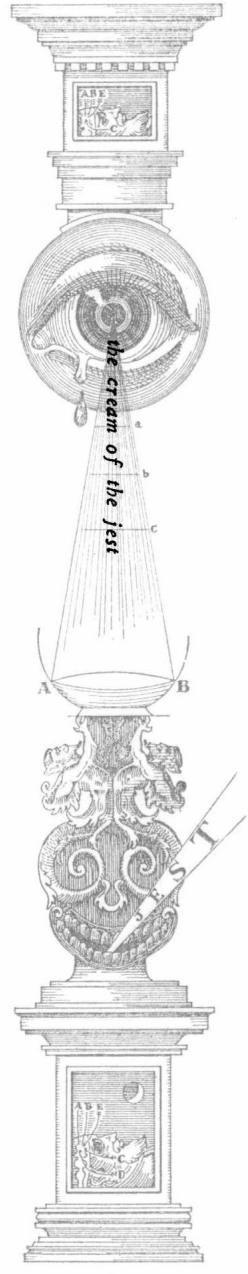


＊1――ドム・マニュエルが奪還し、治めた架空の夢の王国。今、その主都のストーリセンド城主はエメリック伯。

が起って一、二年後彼自身が少しずつ私に話してくれたのを、私がメモし、つなぎあわせたものだ。ケナストンがその印璽とよぶものについて話してくれるずっと以前から、私はケナストン夫妻を知ってはいた。とは言え、田園暮しの常として長くて浅い近所づきあいといった工合にであった。その起ったこと――というか、起ったらしいこと――を語り、私の問に答えてくれたとは言っても、ケナストンの話し振りはまるで投げやりな、あきれるばかりに突っ放した調子だった。話は全体に言いようもなくいかがわしく思え、私はメモとりつつも少なからず驚いたことであった。

今にして判るのだが、ケナストンの価値基準は常軌を逸しており、まこと人間離れしていたのだ。つまり己を導いている摂理が如何ほど信頼できるものかなど問題外で――つまりケナストンは自分のことを同じ人間族の世界を動きまわっている生身の人間とは考えていなかった。というか、少なくとも己が存在のそうした部分は彼にとって最早取るに足らぬ側面だったのである。

だが今ケナストンの思想について語るのは先走りというものだ。これからその全貌、及び私がきいたままの彼の話を記そう。先ずは私の好みで、まるで夢のたわ言の如くに始めるのを許して頂きたい。というわけで、さて、世界は未だ若く、ところはストーリセンド城、モーギ・デグルモンの反乱も事実上収まったかに見えて、白髪のマニュエル王の輝かしからざる子息、第四代エメリック伯が再びポアテムを治め始めた頃のことであった。という工合に持って回って遙かな昔から始めてこそ、夢想は夢想を呼び、果ては、人生は盲目無目的の技、お先真暗の荒地の混迷にあらず、我ら人間（いつの日にか、ではあるが）力強く立ち優り賢明にな



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c